

発表題目：空間の隙間を動いて関係を調整する
ーモザンビーク島の近所づきあいの親密さと緊張、その解消

所属：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程（5 年一貫制） 氏名：松井 梓

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表が扱うのは、アーリ[2015]のモビリティ概念が想定するグローバリゼーションを背景とした移動とは異なり、小さな島の小さな居住空間で起こる移動である。だが、アーリの視点にもあるように、この小さな移動は居住空間の住居の配置、張り巡らされた路地、スワヒリ式住居の間取り、そこに生まれた隙間など、移動を可能にする多様な構成要素が絡みあいながら営まれる。

本発表は、ポルトガル植民地期に首都も置かれた狭小な島、モザンビーク島の南半分を占める低階層の人びとの居住地区、バイロを対象とする。「原住民」が住むバイロの治安悪化を恐れた植民地政府は、都市計画に従い家々を稠密かつ直線的に配置し、家どうしに距離を設けて路地を張り巡らせた。さらに、植民地期に画一的な様式で建てられた、複数の寝室を持つ堅固なスワヒリ式住居が、内戦中にさらなる人口流入を受け入れ、複数世帯の共住と食の授受、賃借・転居が常態化した。

今日のバイロの女性たちの近所づきあいは、稠密に住まう隣人たちと食べ物をやり取りするほど濃密なムラ社会的な側面を持つ一方で、その関係は固着せず、親しいつきあいの相手は摩擦や転居により数か月～1 年ほどの短期間に柔軟に組み替わる。他方、一度切断された関係も、険悪になりすぎることなく再び接続されうる。この、濃密に関わりあいつつも関係がドライで柔軟に組み替わる隣人関係は、ひとつには、居住空間に点在する「隙間」を人びとが移動することによって可能となる。

本発表では、まず、バイロで見られる小さな移動が、歴史的に形成された居住空間の配置と絡みあいながらどのように促されているのかを示す。そのうえで、この小さな移動が関係の流動性を担保することで生じているかに見える近隣集団のバランスは、調和的な均衡といえるのかを検討する。

以下に結論を要約する。統治を企図した見通しのよい均質的な空間配置は、稠密さにもかかわらず周囲の全ての住居に等しく容易な移動を可能にし、頻繁な接触と濃密な近所づきあいと同時に摩擦も生んだ。他方、この配置により隣人関係に選択肢が生まれ、家の裏に住む隣人との関係が悪化しても表の隣人となつき合いを始めるなど、関係の組み替えを容易にした。その過程で、女性たちは自宅を取り囲むいくつもの隙間、すなわち路地や空き地、周囲の各戸に備え付けられたスワヒリ式のベンチなどの特定の空間との関係を隣人との関係性にに応じて組み換え、朝の洗濯や夕涼みの場所を移動していた。また、複数の寝室を持つスワヒリ式住居の間取りは、寝室単位で賃借する非親族も含めた緊密な共住と食の授受を促したが、ここでも摩擦による頻繁な転居が見られた。しかし、近隣にいくつもの小さな居住空間（スワヒリ様式住居の寝室）があるために、この隙間に移動することで共住の解消が可能となる。仲違いした隣人と距離を置くことで緊張が和らぎ、関係が再接続されることもあった。

だが、移動によって親密さと緊張が調整される過程は、隣人関係がひとつのシステムとして調和に至るような安定的なものではない。アーリ[2014:41]が「動的な不安定性」と述べるように、親密さと緊張感を継続的に調整しながら移動するからこそ、濃密さとドライさが保たれているのである。

アーリ・ジョン, 2014, 『グローバルな複雑性』吉原直樹, 伊藤嘉高, 板倉有紀訳, 法政大学出版局。

アーリ・ジョン, 2015, 『モビリティーズー移動の社会学』吉原直樹, 伊藤嘉高訳, 作品社。